

『異郷を羽織る -Drape the Strange land- 』（日本語版）

脚本 | 岡本昌也

※演出意図として一部記載していない部分がございます。

「わたし」は…

「わたし」は…人間

「わたし」は…女

「わたし」は…若くって

ここに滞在している…

滞在…？違う違う違う

“住んでいる” そう…そう… ここに住んでいる。この国に。

長い長い道を歩いて、ここにたどり着いたんだ。

この国の言葉をうまく話せない！

それでも！聞こえる、この町の鼓動が。

けれど！それは故郷の音じゃない。

瞳は、生まれたてみたいに輝いていた。

耳は波紋のように震えていた。

街をさまよう。あてもなく…

ゆれる、ゆらゆら、たゆたう、酔いどれみたいに

ゆれる、ゆらゆら、たゆたう

この街を知らない。なにもかも。誰も知らない。

誰も「わたし」を知らない。

心が揺さぶられる…

逃亡者

瞳の色を変えても

逃亡者

まなざしは暗いままで

疲れたし、腹も減っている。

嘘のパスポートで地の果てまで行けど

いつでも どこでも

誰かが見張ってる 神様みたいに

故郷の街を想像しながら歩いた。けれど目には何も映らない。

この国の冬は日没が早いのだ。白い息が夜に溶けていった。

白い息、黒い夜！

白い息、黒い夜！

白い息、黒い夜！

なぜであろう。街の小さな本屋が目にとまった。

なぜであろう。その中に入った。

なぜであろう。とても落ち着いた。どういうわけか

家で本を読むのが好きだった。祖母がよく、ポエムを読んできた。
故郷では、ポエムを“し”という。“詩”と“死”は同じ音だ。
こう思う。ここを死に場所として選んだんだ、多分そうだ。

眠ろう。深く。さようなら、異郷よ。

その時だった。

本棚に親しんだ詩集を見つけたのだ。

ボードレールの「パリの憂鬱」

祖母から教わった“し”。故郷の言葉で読んだ“し”。

薄れゆく意識の中、詩集を開くとそこには慣れ親しんだ“し”があった。

慣れ親しんでない言語で。

その“し”を 異郷の言葉で読みながら、故郷の言葉で詠じた。

異郷で読んだ詩、故郷で読んだ詩 同じものであることに気が付く。

電撃が走る。

わたしは故郷で、そして、この町で生きているのだ。

本屋から飛び出した。

暗く、何も見えなかった街の夜が明けた。

見える、街がすべて。ひとつひとつ、声を出して歩いた。

その時見たそれらは間違いなくみな、わたし自身だった。

わたしは人間。	わたしは木。
わたしは女。	わたしは月。
わたしは男。	わたしは街灯。
わたしは若者。	わたしは道。
わたしはキツネ。	わたしは飲み屋。
わたしは駐車場。	わたしはタバコのしけもく。
わたしはほ乳類。	わたしは劇場。
わたしは移民。	わたしは公園。
わたしは川。	

—幕—